

平成30年6月19日現在

機関番号：34406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370145

研究課題名(和文) 時の視覚化としての星宿図と歳時図の解釈 - 数理天文学の援用によるジャンル越境の視点

研究課題名(英文) THE INTERPRETATION OF PAINTINGS OF CONSTELLATION AND SEASONAL LIFE THAT VISUALIZE TIME - WITH THE VIEWPOINT OF CROSSING THE BORDER OF THE GENRES BY USING ARITHMETIC ASPECTS OF ASTRONOMY

研究代表者

松浦 清 (MATSUURA, Kiyoshi)

大阪工業大学・工学部・教授

研究者番号：70192333

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：星曼荼羅などの星宿図と、四季絵や月次絵などの歳時図は、いずれも日月星辰を中心モチーフとしているが、前者は密教絵画(宗教画)、後者は装飾画(世俗画)としてジャンル分けされ、両者を横断した観点から日月星辰のモチーフが論じられることはほとんどない。両者を「時の視覚化」という共通の観点から統一的に取り上げ、それらの作品を「時間絵画」としてジャンルを越えて捉え直して、天文学を援用した数理的根拠を伴う新たな絵画解釈を目指した。

研究成果の概要(英文)：Paintings of constellation depict the motifs of the sun, the moon and stars, as paintings of seasonal life of Japan do. However, since the former is classified as sacred or religious and the latter as secular or ornamental, the motifs depicted are seldom referred to from the same point of view of crossing those two genres. The aim of this study is to present a new way of interpretation of paintings: both kinds of paintings are, from the same perspective of visualization of time, dealt with as "time paintings", which go over the genres, by utilizing arithmetic basis of astronomy effectively.

研究分野：美術史

キーワード：星宿図 歳時図 日月星辰 時間絵画 数理天文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 密教絵画のジャンルとしての星宿美術については、星曼荼羅を中心に従来の研究を整理して、その成立と展開に関する研究成果を拙論「星曼荼羅の構成原理と成立について」(『仏教美術論集2 図像学 イメージの成立と伝承(密教・垂迹)』竹林舎、2012年5月)として発表した。星曼荼羅の中尊である一字金輪は、天の北極すなわち現在の北極星こぐま座 星と同定される解釈が一般的である。しかし、天の北極は歳差運動によって約25700年周期で変化するため、星曼荼羅が成立した平安時代中期の天の北極はこぐま座 星ではなかった。これは数理天文学の基礎知識であるが、この基礎知識を欠いた恣意的解釈が思いのほか多く、数理天文学を導入した星曼荼羅研究の必要性を強く意識したことが星宿美術(日月星辰美術)研究の出発点である。星曼荼羅の研究には、九曜星の配置とその意味など解明すべき課題も多く、継続的な研究が必要である。

(2) 一方、その研究の中で新たな問題意識も芽生えた。それは、星曼荼羅などの密教画ジャンルに限らず、わが国には日月星辰を描いた絵画作品が数多く残されているにもかかわらず、日月星辰を描くことは時間や方位を描くことと同義であるという数理天文学の基礎知識を欠いた解釈が、あまりに多いという問題意識である。特に、遺例に恵まれる室町時代後期以降の障屏画ジャンルでは、四季絵や月次絵などに描かれた天体としての月の解釈に驚くほど誤解が多い。例えば、下弦の月(図2)を上弦の月(図1)と誤解する記述や、二十六日月(図4)を三日月(図3)

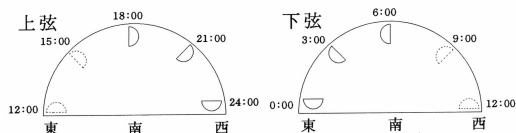


図1. 上弦の月

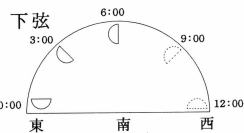


図2. 下弦の月

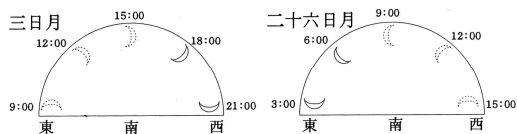


図3. 三日月

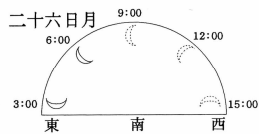


図4. 二十六日月

[図1～4は、米山忠興『教養のための天文学講義』(丸善株式会社、1998年5月)より引用。]

と誤解する記述である。三日月は夕刻の西の空に、二十六日月は夜明け前の東の空にみえる。山の端の上弦の月は夜半前に西の空に沈む姿であり、山の端の下弦の月は夜半過ぎに東の空に上ったばかりの姿である。月は時刻と方位の記録そのものである。景物画という概念で四季絵や月次絵などを包括し、絵画と歳時の関係を解明しようとする試みがこの研究分野の第一人者によって提唱されているが(武田恒夫『日本絵画と歳時 景物画史論』(ペリかん社、1990年4月)その斬新な試みにおいてさえ、その誤解は解消されていない。この高著の中にも、下弦の月を上弦の月とする記述(浮田一蕙「四季景物図」の解説:同書88頁、出光美術館蔵「月に秋草図」の解説:同書111頁)や、二十六日月を三日月とする記述(東京国立博物館蔵「日月山水図」の解説:同書97頁)がある。歳時を描く絵画は、季節を時刻あるいは時間帯とともに描くことが基本であり、どの季節の、どの時間帯の景物かという観点こそ、日本人の歳時に対する感性を読み解くうえで重要であろう。

(3) 天体としての月を描く絵画でのこのような誤解は、同書に限らず枚挙にいとまがない。この誤解は、美術史が数理天文学との接点を持ってこなかったことの表れであろう。この観点から基礎数理天文学を援用してまとめた論考が、拙論「片袖縁起」における時の視覚化について」(『軍記物語の窓 第四集』和泉書院、2012年12月)である。この拙論は、近世の浄土教絵画における天体としての月の表現が、画面に時刻と方位の枠組みを与える重要性を論じたもので、星曼荼羅研究の問題意識から派生した研究成果である。さらに、その問題意識は、拙論「北斗七星と九曜星を伴う江戸時代の妙見画像の一例 誤謬解釈を越えて」(『武田佐知子先生退職記念論集』思文閣出版、2014年2月)の執筆に発展した。この拙論は近世の妙見信仰に関わる図像の誤謬を取り上げているが、歳時を描く絵画においても、天体としての月の表現に十分注意するよう喚起している。

(4) このような経過と問題意識を踏まえ、星宿図と歳時図を包括する一貫した統一原理で日月星辰の絵画表現を解釈する必要性があるという、新たな認識の段階に至った。宗教学や文学などの隣接学問だけでなく、美術

史にとって遠い位置にあると思われがちな数理天文学の知識も援用することで、はじめて日月星宿を描く絵画の正しい解釈は可能になるものと考えたことが、研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

(1) 研究を継続している星曼荼羅についての当面の課題は、九曜の配置形式の原理を解明することである。これは平成 23~25 年度までを研究期間として採択された科学研究費の研究において十分解明できていない継続課題である。また、星曼荼羅以外の星宿図においては、図像の中に北斗七星を伴う作品が多く、如意輪観音像、十一面観音像、虚空蔵菩薩像などの尊像との関連性が中心課題となる。これらの宗教絵画における教義の視覚化を数理天文学がどのように合理的に解釈できるかという課題は、これまでの星曼荼羅の研究では取り上げてこなかった。それは、限られた研究期間では過重な課題設定であると判断したためである。しかし、星曼荼羅の研究が一定の成果を上げつつある状況においては、この点も視野に入れて考察することが必要となる。

(2) 一方、室町時代後期以降の四季絵や月次絵などの装飾画や鑑賞絵画については、これまで数理天文学との接点がほとんど認められない。これらのいわば歳時図は、歴史や文学との関連性に話題が集中し、四季変化に注意が払われるにもかかわらず、時間認識は希薄である。特に日月を描く絵画作品に重要作品が多く、個別作品解説も多くの研究者によってなされているが、既述のとおり誤解が多い。限られた研究期間で研究成果を示せるよう、月を描く絵画作品に焦点を絞り、従来の作品解釈を検証する。

(3) これら星宿図と歳時図を時の視覚化として一貫して取り扱い、「美術史の独りよがり」とでも呼ぶべき誤解の実態を、数理天文学の基礎知識を援用して明確化する。そのうえで、個別作品の画面構成原理が、宗教や文学などどのように結びついているかを解明する。ただし、このような観点は従来考慮されてこなかった新しい観点であるため、対象領域を限定する。中世の絵巻物や近世の風俗画などは参考程度とし、日月星宿を描く絵画作品全体を体系化することは意識しない。それは今後の研究成果の進展を踏まえて

の次の段階の課題設定とする。

(4) 密教絵画のジャンルと装飾画（障屏画）のジャンルは、それぞれほぼ独立したジャンルとして存在しており、両者の接点は希薄である。しかし、日月星辰を描く絵画は、必然的に時刻や方位を描き込むいわば「時間絵画」としての記録性をもつため、星宿図と歳時図はジャンルを越えた同一の基盤の上に制作された絵画として共通の性格をもつといえる。むしろ、それらを貫く統一的な時間認識によって作品分析することが作品解釈の第一歩であるはずだが、従来、そのような認識は両ジャンルにおいて存在しなかった。

(5) 本研究は、従来の絵画ジャンルを越境し、日月星辰を描く絵画を時の視覚化と捉える新たな試みである。具体的な絵画分析に援用するのは数理天文学という美術史とは異なる領域の基礎知識であるため、学術的な枠組みも越境することになる。しかし、このような新しい視点を導入しなければ、時を視覚化する絵画を正しく理解することはできない。この研究により、従来の恣意的で独善的な印象批評を払拭し、明解な数理的根拠を伴う絵画解釈が可能になることを目指す。美術史の試行が真に学術的な挑戦であることを証明することにも寄与するものと考えている。

3. 研究の方法

(1) 現存する星曼荼羅について、特に九曜の表現を中心に、関連経典と図像との比較を通して特色を整理し、ホロスコープ占星術との関係を考察した。これに関しては、これまでの研究成果としてすでに収集した星曼荼羅画像データベースを活用した。

(2) 鎌倉時代以後に制作された星曼荼羅を当面の考察対象とし、必要に応じて、北斗七星を描く作例なども取り上げつつ、図像的な比較検討をおこなった。その際、ホロスコープ占星術が西洋占星術の展開であることに関連して、西洋の十二宮図像を含む日月星辰絵画も考察の対象とした。いずれの図像解析・図像比較のためにも作品の写真データの収集が前提となるため、写真撮影の継続を研究計画の基本とした。

(3) 収集した星曼荼羅画像データベースに新たな画像情報を加え、星辰データベースへと拡張させることにより、方形と円形の両者にわたる星曼荼羅の全体像の解明をめざした。

4. 研究成果

(1) 星曼荼羅に関する中心課題として、円形

式における九曜の意味・役割と配置について考察した。大阪・久米田寺本を代表とする方形式の構図が中国の陰陽五行思想を強く反映することは、拙論「北斗曼荼羅の構成原理と中尊の性格について - 大阪・久米田寺本を中心に -」(『軍記物語の窓 第三集』和泉書院、2007年12月)で既に指摘している。一方、円形式の構図については拙論「星曼荼羅の成立とホロスコープ占星術 - 円曼荼羅の構成原理を中心に -」(『密教美術と歴史文化』法蔵館、2011年5月)で論じているが、九曜の構図上の意味と役割については触れていない。この点については、拙論「星曼荼羅の構成原理と成立について」(『仏教美術論集2 図像学 イメージの成立と伝承(密教・垂迹)』竹林舎、2012年5月)においても解明できていない課題である。方円両形式において、星曼荼羅の主要構成要素としての北斗七星、十二宮、二十八宿、三十六禽はいずれも恒星であるため、相互の位置関係は変化しない。列次の問題だけである。しかし、九曜の五星は惑星であり、日月と二隠星を含めて相互の位置関係が変化する。五星集合の観点からその意味を考察しているが、まだ合理的な解釈に至っていない。特に中尊の意味づけと経典『七曜攘災決』が鍵になるとの予想を持っているが、この点に関しては継続して考察する。

(2)本研究の重要な観点であるジャンル越境に関しては、近世大阪の文人画家・岡田米山人の「戊辰」の年号をもつ「山水図」(個人蔵)について考察した。密教絵画における星宿図とはジャンルが全く異なるが、本図の画賛は作者である米山人の「隠栖」の時期をめぐる漢詩となっており、描かれた絵画は一種の「時間絵画」として捉えることが可能である。文人画の解釈に画賛が重要であることは言うまでもないが、本図は詩書画一体となって「時の視覚化」を図った側面をもっている。米山人の隠居の時期がいつなのかは明確でないが、それを示唆する作品として貴重である。研究成果は『淀川舟遊』(摂南大学・くらしの今昔館、2015年7月)に「米山人の隠栖を示唆する画賛について」と題する研究論文として発表した。

(3)近代絵画におけるジャンル越境の視点として、近代の版画家・浅野竹二の「中之島夜景図」(個人蔵)を取り上げた。本図は昭和8年(1933)に制作されたことを示す年紀を有する作品であり、画面に月を取り込む夜景図である。写真ハガキに基づいて制作されたとみられる写実的版画であるが、画面の中の月の表現は現実のものではない。描かれた月は、時刻と方位が合致しない。月を描く絵画は「時間絵画」とでも呼ぶべき特性をもっている。時刻と方位を同時に固定してしまうからである。本図は一見すると中秋の名月を愛でる夜景と解釈してしまいそうになるが、画

面の視点からは、中秋の名月は見えない。絵画はフィクションであって、画家が表現したい世界が視覚化される。研究成果は『大大阪モダニズム - 片岡安の仕事と都市の文化』(大阪工業大学・くらしの今昔館、2018年7月)に「幻影の中之島公園夜景図 - 浅野竹二「中之島公園月夜(新大阪風景之内)」と題する研究論文として発表した。

(4)近世大阪の琳派絵師・中村芳中の扇面作品「月に露草図」に描かれた月の表現の特色について考察し、現在、論文を執筆中である。本図の月の表現は扇面の形態を活かして描かれており、露草との取り合わせから、これも「時間絵画」としての特質をもっていると解釈される。この研究成果については、いずれ論文として公開する。

(5)月に関する絵画作品の研究発表1件と天に関する絵画作品の研究発表1件の都合2件の口頭発表を所属する研究会でおこなった。1件は、月の表現がポイントになる近世の絵巻物についての研究発表。大阪・大念佛寺が所蔵する『片袖縁起』は幽霊の絵巻物として知られるが、月の表現が時間に関する画面展開の重要モチーフとして描かれている。第14回天文文化研究会(2015年12月26日、大阪工業大学うめきたナレッジセンター)において、「『片袖縁起』に描かれた月の表現 - 絵画の中の時刻と方位 -」のタイトルで発表した。もう1件は、星辰信仰と密接な関係がある天神画像についての研究発表。防府天満宮が所蔵する 三季天神像 は、類例の少ない正面向きで直立する姿に特徴があり、その成立と展開には中世末期の特異な天神信仰が関わっている可能性を指摘した。第5回松崎天神縁起研究会(2015年2月14日、防府天満宮歴史館)において、「防府天満宮所蔵の 三季天神像 について」のタイトルで発表した。

(6)星辰信仰と密接な関係にある天神画像について、大阪天満宮社報に新たな知見を報告した。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

松浦清、『片袖縁起』に描かれた月の表現 - 絵画の中の時刻と方位 -、天文文化研究会(第14回) 2015年12月26日、大阪工業大学うめきたナレッジセンター。

松浦清、防府天満宮所蔵の 三季天神像 について、松崎天神縁起研究会(第5回) 2015年2月14日、防府天満宮歴史館

〔図書〕(計2件)

谷直樹・東由梨・渡邊望編、大阪工業大学・大阪くらしの今昔館、『大大阪モダニズム - 片岡安の仕事と都市の文化』、2018、80(68

- 69、松浦清「幻影の中之島公園夜景図 - 浅野竹二「中之島公園月夜（新大阪風景之内）」」。

岩間香・谷直樹・服部麻編、摂南大学・大阪くらしの今昔館、『淀川舟遊』2015、80(64-65、松浦清「米山人の隠栖を示唆する画賛について」)。

〔その他〕

講演会(計4件)

講演者：松浦清

講演表題：蕉門大学公開講座「前田コレクションの名画 - 2件の重要文化財を中心に - 」

講演企画：前田教育会

講演年月日：2017年11月8日

講演場所：前田教育会館(蕉門ホール)

講演者：松浦清

講演表題：大学・専修学校等オープン講座「夏らしく“幽霊”の絵巻物など、いかがでしょうか？」

講演企画：大阪工業大学地域連携センター

講演年月日：2016年8月10日

講演場所：大阪工業大学

講演者：松浦清

講演表題：摂南大学国際教養セミナー「淀川をめぐる文人と大坂文化」

講演企画：摂南大学

講演年月日：2015年8月9日

講演場所：大阪市立住まい情報センター

講演者：松浦清

講演表題：大学・専修学校等オープン講座「仏像の誕生」

講演企画：大阪工業大学地域連携センター

講演年月日：2014年7月23日

講演場所：大阪工業大学

依頼原稿(計4件)

松浦清、表紙解説「天神画像」、てんまてんじん(大阪天満宮社報) 査読無、第73号、2018年1月1日、pp.1-2。

松浦清、表紙解説「菅公像」、てんまてんじん(大阪天満宮社報) 査読無、第71号、2017年1月1日、pp.1-2。

松浦清、表紙解説「天神画像」、てんまてんじん(大阪天満宮社報) 査読無、第69号、2016年1月1日、pp.1-2。

松浦清、表紙解説「束帯天神画像」、てんまてんじん(大阪天満宮社報) 査読無、第67号、2015年1月1日、pp.1-2。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松浦 清 (MATSUURA, Kiyoshi)

大阪工業大学・工学部・教授
研究者番号：70192333